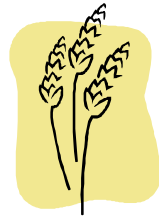


背高泡立草



長い留守の間、管理を依頼していた七畝ほどの田がある。二つの岡の間の三角形の地形に、底辺の部分から何枚もの田に区切られていて、わが家の田は頂点の方から三枚目ほどの奥にある。柵田の美味しい米のとれる田なのだそうだ。しかし昨年から作ってくれる人がいなくなつた。私が鹿児島に来たのは去年の夏のこと、もう既につくられていなかった。対応していた筈の姑の話ではさっぱり要領を得ない。

上の田を作っている人に頼んでみたが、機械が入つてしまふから駄目だと云う。どうやら水はけが悪いらしい。以前はどうだったのか、だんだんに悪くなって限界にきたのだろうか。機械が大型になったのだろうか。

夫が帰つて来たのは今年の夏で、春にはまだ私一

人だつた。今年は休耕田とするより仕方がなかったのだが、そろそろ稔りの秋ともなつて、夫が現状確認に行つて来た。

「いやもう一面に俺の丈くらの草が生えていて、背高泡立草といふんだそうだが、あれは刈つておかねば近所迷惑だろうな。」

と云う。何でも秋になると固くなつて、刈るといつても鎌などの手に負えるものではないらしい。何も作つていないのに人手を頼むのも馬鹿らしいことと、思い切つてモーターの草刈機を買つて自分でやるうといふことになつた。

農耕機店の主人が持参した中で、夫は一番馬力の出るといふ構造の単純なものを選んだ。ガソリンタンクの下のをえいと引くと、ブルルンとモーターがかかつて、いかにも威力ありげなのが私には恐ろしい。

十月も上旬のよく晴れた朝、いざいざ出陣である。私の軽自動車のトランクに新兵器の長い柄をやつと収めた。

夫はかつてハーバード大学の生協で買った厚手の綿のチエックのシャツに作業スボン、長靴を履き首にタオルを巻き、ゴルフ帽といういで立ちだが、それでも農作業には不自然ではなく見える。私は綿のもんべに綿無地のシャツ、綿のアノラックを羽織ってウオーキングシューズ、マフラー代わりにピノクのタオルを巻き、ピケ帽を被って、気分はもうお百姓さんである。

現地に着いて機械を取り出した。始動する機械の近くにおいて事故にあった人の話を聞いていたので、三米ほど離れたところで様子を伺う。ところが何回紐を引いてもブーンというだけで掛からない。結局夫は、農耕機店まで再度説明を聞きに、軽自動車ですら細い農道をたどるとしくバックする羽目となった。

日も高くなり、私は日陰に待っているのだが、腰を下ろすところがない。見上げれば杉の岡はまだ緑濃くその上に群青の空が広がっている。ふと鷲が一羽舞い上がって、羽ばたく翼の白をキラキラと陽

光に燦めかせながら、杉山の彼方に消えた。

夫が戻ってきた。

「どうだったの」

と聞いても

「いや一寸したことだった」

としか言わないで、ぐつと紐を引く。と今度は快調に唸りだした。

夫はその唸りを上げていている機械をなんとか着装して湿田に入った。見よう見まねの仕草で草を薙ぎ倒して行くが、敵の背高泡立草はなかなか手ごわそうで、薙いだ草をつまぐ払えない。これから薙ぐ方向に倒れてしまうのである。それに、この威力ある草薙機は相当の重量らしく、それも上手に振り回せない原因となっているようだ。

二、四十分もすると、もうダウンである。真っ赤な顔で戻ってきた。しかし半分程はなんとか薙ぎ倒されていた。持参の林檎ジュースを飲み干す夫の顔は汗まみれであった。

翌朝また再度挑戦である。今度は私も雨靴を履い

た。サーピスのピンクに色付けされたオイルも切れそうなので、ガソリンスタンドに戻って満タンにして貰う。

私は、ズブズブする田を抜き足差し足で、刈り倒された泡立草を邪魔にならない方向に反転させて回った。怖いので夫には近づかないように注意しながら。

「あっ」
と言っ叫び声に、驚いて目を上げると夫が引っ繰り返っている。
「危ないっ。止めて、止めて。」

私も叫んだ。夫もはっと機械を止めた。近寄ってみると、何と其処には排水用の直径五十センチほどの土管が縦に埋めてあって、上は枯れ草で覆っていた。まるで落とし穴である。夫は勢いよく踏んでしまったらしく、機械をはずして立ち上がると右足は股の付け根まで濡れている。幸い外傷はなく、夫も続行すると言っ。もう九分通りは終わっていた。打ち身の痛みは明日は出ることだろうが、夫の動作

も大分板について来たので、あと一息である。

やがてさしも難物の背高泡立草もようやく退治し終わって、畦の萱の類まできれいに刈った。左側の田は稲穂が垂れているが、右側の田は休耕田で除草剤の掛かった萱がしおたれている。手前の田は既に刈り入れが終わって切り株が整列している。

来年はこの田をどうしようなどと話ながら、初めての農作業(?)に二人とも大満足で、意気揚々と帰路に着いたのだった。

平成7年10月)

